

過去に「個人を捨てる」と覚悟して（会社借入以外に個人借金が約一億円あったので・苦節15年で返済）物質的な物全て（自宅も）自ら捨てた後、インスピレーションが浮かぶようになりました。380週分（約7年分）をまとめたものです。

香川 湧慈語録（インスピレーション綴り）

- 一、 男の幸福とは、一生を賭けて成し遂げるべき仕事を決意し、その志に邁進し、結婚の縁があるなら、自分の志、生き様に心から添うてくれる伴侶と共に人生を歩むこと。
- 二、 女の幸福とは、志ある男と出逢い、その生き方に心から添え共に人生を歩めること。結婚の縁があるとか、無いとかは、幸福の基準に非ず。
- 三、 子の幸福とは、親の恩を感じ、自分らしく生きること。
- 四、 自分の価値を見つけた時、人は翔く姿勢に入る。
- 五、 全てのものが育つのは、キッカケと環境である。
- 六、 自社商品をお客さんが使っている場面を数多く創造すること、新しいカテゴリーが創出できる。
- 七、 アンケートは、お客さんが嫌と感している点を述べさせること。すると、お客さんの欲する心が見えて来る。
- 八、 教育の原点は、読み、書き、ソロバン、聴く、話す。読むとは、思想を学ぶ。書くとは、お客さんへのメッセージを考える。自分の考えを文章にすること。ソロバンとは利益感覚。聴くとは、人の話を真剣に聴く。話すとは、自分の言葉で話す。具体策の無い理念は躍動しない。
- 九、 社長の仕事は、良い社風を作ること。社員教育は、社長の仕事である。
- 十、 顧客基盤をコストを掛けずに確立し、維持することが出来たなら、成長出来る。
- 十一、 仕事は恋心。
- 十二、 若さの秘訣は、外との交流。
- 十三、 シンプルに立ち返った時、見えて来る。
- 十四、 仕事の取り組み姿勢が人柄を作り、人格を作る。そして、最後は人柄がものを言う。
- 十五、 自社ブランドを安売りしない事が誇りにつながる。
- 十六、 世界に進出する第一条件は自社ブランドを大事にする事。
- 十七、 製品はウソをつかない。ウソがつかないのである。
- 十八、 人を動かすには、人の心が読めないといけない。人の立場に立てなければ、人は動かせない。だから、人は悩むのだ。故に、悩んだ事の無い人は、人を動かすことが出来ない。

- 十九、目に見える結果に触れた時、その背後にある「見えないもの」を窺て、学びの投資をすべきである。
- 二十、納得して働ける環境が大事。
- 二十一、学問が根底無い商売は、一種の投機である。
- 二十二、学問は、実践して初めて学問となる。
- 二十三、時間を有効に活用した者が成功者である。
- 二十四、人間は、一定の能力を連続して発揮出来ない。
- だから、「休息」と「気分転換」が必要なのだ。
- 二十五、需要は、メーカーのアイデアと生産手段が創り出すもの。
- 二十六、将来に互つてその人がどういう能力を発揮し得るか、という観点のみから、人を観ること。
- 二十七、絶対に逃げないと覚悟した時、その仕事为天職になる。
- 二十八、同じものでも、自分らしく扱う事で、価値の創造が出来得る。
- 二十九、相手(顧客)のことを自分なりに掘り下げること、相手の気付いていない「ニーズ」に応えることが出来得る。
- 三十、本業に魂を注ぐ時、工夫が生まれて来る。
- 三十一、想いは、伝わる。
- 三十二、感性を磨くには、身銭投資することである。
- 三十三、出来ていないから恥ずかしいのではなく、出来ていない事を知らない事が恥ずかしいのである。
- 三十四、「人」としての仕事をした時、お客に真剣になった時、お客が見えて来る。
- 三十五、最も重視すべきは、お客の心地良さである。
- 三十六、非日常を体験しないと、相手に満足感は与えられない。
- 三十七、自分の得意を通じて、お客さんにハッピーを与える。
- 三十八、企業が社会に対して、情報を提供して行かねばならない。
- 三十九、全身全霊を捧げた行動に、顧客は感動し、独自商品開発のチャンスが与えられる。
- 四十、変えようの無い事実を丸ごと受け入れて、工夫して行くこと。
- 四十一、悪いと思える出逢いに感謝出来ないのは、その出逢いを受け止めるだけの心の器が無いからである。また、それが出来ないなら経営者をしてはいけない。
- 四十二、罪とは、本来やるべき事をやっていない事を言う。人間が考えた道徳的な事ではない。罪とは、気が枯れること。(氣枯れ≡汚れ)
- ヤル氣の無いのが一番の罪なのである。
- 四十三、様々な経験を重ねる繰り返しの中から、尊いものが生まれて来る。赤ん坊は清らかだが、赤ん坊のままでは、何も成さない。玉石混交の体験を重ねて、人のお役に立てるのである。

四十四、今、目の前の事を真剣に実践することが天命である。

四十五、人間は、元々悟っている。その悟りを如何に活かして行くかが、人生なのである。

四十六、鏡(カガミ)は己を映す。ガ(我)を取ることで、カミ(神)に成る。

四十七、本来の姿は「統一的多神」である。神とは、役割を果たすものの意味。

つまり、社長の下に心一つに、各々が各々の役割を果たしている状態のことを神と言う。

四十八、「反省」とは、二度と同じ過ちを犯さないことを以って証拠とし、

己が何を為すべきかを考えることを言い、そして、次に創意工夫をすることに至って初めて反省と言うのである。

つまり、反省とは、己の言動に責任を取ることで。

四十九、まず、反省すべきはトップである。

五十、切腹は、己一人が死ぬことで、皆が助かるという前提で行うもの。

五十一、年齢でなく、目覚めた時、出来る人間に成れる。

五十二、優秀な人とは、教える能力の優れた人である。

五十三、教育の本質は、講義力と指導力である。

五十四、社業を通して、国家にどう貢献するかを心懸けること。

五十五、大海のような愛情が、相手に安心感を与える。

五十六、経営者に一番重要な資質は「愛情力」である。

五十七、偶然性をどう必然性と捉え、工夫して行くかである。

五十八、本当に良い物とは、最もシンプルで限り無く自然体に近い存在である。

五十九、心に豊かさを持っている者は、益々、その豊かさを増し、心の貧しい者は、その持っているものをも奪われ、いつの間にか消えて行く。

六十、豊かに恵まれて初めて感謝が出来るのではなく、感謝するから、

感謝に値する環境が生まれて来るのである。

六十一、不平不満に生きている者は、不平不満の環境の中に一生を送らねばならない。

六十二、物質や環境は、その人の器のある間だけ整っているのである。

六十三、己は、この世で何をするのか。を明らかにすることを宗教と言う。

六十四、この命の持っている無限の叡智とエネルギーを100%使いこなし得るものが神であり、神格はそこに生じる。

六十五、反省をする姿が、払い給え、清め給えである。

相手に対して恥じる事の無いよう、自らを律すること。

六十六、自分の手のひらの中にあるものを、どれだけ大事に扱っているか、

接しているか。ということが払い給え、清め給えである。

六十七、そこにある感情をそのままに肅々と立つことを鎮魂と言う。

六十八、どんな状況になつても、確りと立つて居られる軸を持っているか否かである。

どんな事があつてもブレない軸を持つて。

六十九、本来やらねばならぬ事をやつていない状態を氣枯れと言う。

七十、己の罪に真摯に向き合うことを懺悔と言う。

七十一、これしか出来ないと言信した事に徹することが、己を生きること。

七十二、より、大義を果たしている会社が生き残るのである。

つまり、理想を形にして行く会社しか、生き残つて行かなくなる。

七十三、社員一人一人が納得の行く人生を歩んでほしい。その為の勇氣を与えたり、

感動を与えることの出来る会社でありたい。

七十四、明るい人は、希望を他人に示すことが出来る。

七十五、明るく振舞う必要がある危機が必ずある。

そういう人にしか、運命の女神は微笑まない。

七十六、努力は報われる時もあるれば、報われない時もある。

それでも、坦々と努力を続ける人が本当の努力家である。

七十七、大きな失敗をしても、一週間の休暇でヤル氣を取り戻せるなら、

その一週間の休暇こそ、最高の努力。

七十八、老後は、自分で創り出した年金を。リピートある顧客という名の年金を。

七十九、人に会う効用は二つ。

一つは、自分はいま行くつていないと自覚でき、

もう一つは、自分は自惚れていたと自覚出来る事。

八十、会社は、社長と社員の成長の場。

八十一、社長は、社員が成長するキツカケと環境を作るのが役目。

八十二、結果とは、あらゆる部門の努力の合作である。

八十三、分別とは、心でするもの。才覚とは、氣の働きに過ぎない。

八十四、他の誰が、どんな批判をしようとも、女房だけは、夫を支える覚悟を

持たなければ、充実は生まれぬ。

八十五、日本の神々は試練は与えない。教育をするのである。

八十六、目的無き民主主義は愚衆政治である。

八十七、互いに認め合い、互いに感謝するだけでは、ダメ。

その上で、何を為すべきかを明確にする事が民主主義である。

その調整役が中心人格であり、決してジャッジしてはならない。

八十八、中心人格は、切るべき者を切つた上で、更地にしてから、スタートすること。

独断ではいけない。そして初めて合議制が成り立つ。

八十九、経営とは、経営者の考えを社員の協力を得て、達成すること。

九十、人間として最も大切なことは「自覚」と「器量」である。

九十一、失敗した事を学ぶことで、人生に無駄が無くなる。

九十二、一人一人が自分の立場を自覚して「情」を通い合うこと。

九十三、自分で自分の料簡を狭くすることで、地獄になる。

九十四、発心することで「縁」を呼び寄せる。

九十五、広告はその会社の魂の叫びである。

九十六、広告は本来、お客さんに対して自分たちが一体何を、どういう風に考えて

商売しているか、という意見の表明である。

九十七、広告には、哲学が必要。

九十八、真面目と誠意だけでは通じない。何を為したかという行動しか、

将来生かされない。

九十九、道に迷ったら、ドツプリと浸ること。これ以外に至る道は無い。

百、 商売は、センスであり、戦略。経営は、温かさ。

百一、自分の今、やっている事に、精一杯の責任を感じることに。

百二、その役職に立つ心構えが大切なのである。

百三、品質向上が、メーカーの王道。

百四、全てを自分が承認するから、心が解き放たれるのである。

百五、多店舗展開している会社は、各店に売り上げや利益を競わすのではなく、

本部が定めたモデル店に近付くことを競わせることで「充実」が生まれる。

百六、人は何がキツカケでスイッチが入るか分からない。

だから、相手のスイッチが入る環境を作ることに誠実でありたい。

百七、西洋の教育は、知識を蓄え、経験を重ね、マイスターになってゆく。

衣を着重ねてゆくもの。

東洋の教育は、衣を一枚一枚脱がせてゆく、最後に己に「これしか生きる道は無い」と自覚させ、掴み取らせることを言う。

百八、結婚とは「結魂」のことを言い、一つの命(志)が、縁によつて、一方は甲の腹に宿

り、もう一方がこの腹に宿った。その二つに分かれた命(志)が、一つに戻ることである。二つのものを一つにするのではなく結婚(魂)とは、その自分の片

割れを、一つであった時の片割れを捜し出し、共に生きるということ。

百九、心を磨く前に、見える所を磨け。

百十、自分の限界は自分の意識の中にある。

百十一、待つことは愛である。

百十二、本当の感動は苦労した時しか、味わえない。

百十三、意味の無いようなことを、意味あるようにするのが人生。

百十四、天に通じるものは必ず、人の心に通じる。

百十五、新しい事業を任せるときは必ず、責任者が社長の哲学に共感していることが

前提とならなければ崩壊する。そして成功するか否かは、その責任者の商売のセンスが左右する。

百十六、センスとは、ちよつとした事を感じ取る能力のことを言う。
百十七、豊かさを追い求めると、心が貧しくなつて行く。

今、恵まれていると自覚した時、心が豊かになつて行く。

百十八、責め心の無い厳しさと、狎(な)れ心の無い優しさが大切。

百十九、お金を儲けるより、お金を使うのに、哲学が要る。

百二十、人らしく生きる為に、より良い環境を作つてゆくことを話し合い、
整えてゆくことが、政治であり、経営である。

百二十一、全社員に「人間らしく生きるとは」を説く。

つまり、どうすれば幸せを感じ、充実を味わえるかを説くことが
管理者の役目であり、そして初めて、システムが活きてゆく。

百二十二、親(社長)は、まず女房(幹部)子供(社員)に人間らしく生きる

という哲学を教えることから、全ての生活が始まるのである。

百二十三、重点点を己と相手の中心に持つて行くこと。

百二十四、今、自分に何が出来るのかを自覚して、立つてゆくこと。

百二十五、親が子供にワクワク感を与えてあげることが大事なように、
社長が社員にワクワク感を如何に与え続けられるかがテーマである。

百二十六、一番効率よく人間を成長させるのは、50%の温かく優しい言葉と、
50%の冷たく厳しい言葉である。

百二十七、顔の造作は親の責任。顔の表情は、自分の責任。

百二十八、美しさを身に付けることは難しいが、美しいものに触れることは難しくな
い。

百二十九、業務が煩雑にならないような仕事の受注が大切。一步一步着実にこなして
行くことが個人と会社の充実につながるのである。

百三十、余つた時間とエネルギーで、勘と度胸を養うこと。

百三十一、借金は、借金しか生まない。

百三十二、心に刻む言葉が一つでもあれば、価値を生む。

百三十三、言葉の贈り物をするためにも、哲学を深めること。

百三十四、社業が国益につながるように取り組む姿勢が大切。

百三十五、何があつても、坦々とこなして行くこと。

百三十六、人間関係は、薄くもなく、濃くもなく、淡い交わりが大事。

この「淡い交わり」が難しい。

百三十七、経営者は、望遠鏡と顕微鏡の眼を持たねばならない。

百三十八、己の哲学を以つて、相手の哲学を切る。

相手を刺すほどの覚悟を持つてすれば、事は自然と拓ける。

百三十九、遠慮とは、遠くから相手を慮ること。自我で断ることではない。
百四十、社長と社員でなく、社長即社員。己と一体である。

この感覚を味わえなければ、真の経営者にはなれない。

百四十一、保証人になっても、保証人にはなつてもらうな。行き詰まった時、心が痛む。
百四十二、人は、本音を言える相手がいることが一番大切。

百四十三、来たる人には、やさしさを。去り行く人には、しあわせを。

縁あつて来たれる人には、精一杯の優しさで接し、

縁あつて去つて行く人には、今後のしあわせを願つてあげる、心の器を持ち
合わせたい。縁には寿命が有る。

百四十四、信用すれど、当てにせず。

百四十五、一流とは、隅々まで行き届いていることを言う。

百四十六、苦境に陥つた人に心を奮起させる一言を発せられる人間でありたい。

百四十七、中小企業は社長がブランド。

百四十八、志の一致、無借金経営、システムの標準化。

百四十九、業務は一日8時間。業務後3時間の使い方。人生が大きく左右する。

百五十、氣づく人になるためには「人を喜ばせる」事を、考え続け工夫すること。

百五十一、出来る奴は、どんな時にもアイデアが湧く、いろいろ遊んで来て、

いろんな失敗をした体験が最後には、ものを言う。

百五十二、言葉を理解するから、人の言っていることが理解出来る。

百五十三、自分の氣持ちを伝えるには、豊富な言葉が必要。

百五十四、情報は、自分から出さないと人は寄つて来ない。

百五十五、人は裸になった時、その人の価値が見える。

百五十六、自分と、その人との人間性で仕事はするもの。

百五十七、讚岐人とは、人生の岐路に立つた人を讚え得る人物のこと。

讚岐人としての誇りと自覚を持つる人間でありたい。

百五十八、失敗から成功へのプロセスが楽しい。

百五十九、送り物をする時、引き取りに行く時、人を紹介する時等々、

様々な普段の所作に、その人の哲学が現れる。

百六十、哲学を持つとは、人間は如何に生きるべきかという自分なりの明確な考え
を持つことを言う。

百六十一、真の家族には、権利と義務の関係は無い。有るのは、責任と感恩の関係であ
る。

百六十二、忙しくない事が大切。丁寧な仕事が出来なくなる。だから、安易な大量
受注は取らないように。

百六十三、高利多売にチャレンジする。だから「高利適売」に成つて行く。

百六十四、小さい会社だから、全ての工程を自分の目で確かめながら仕事出来る。

百六十五、社員を経費と考えてはいけない。

百六十六、バイトするなら、自分に必要な技術を学べる所でするべし。

百六十七、自分の価値をお客さんに認めてもらえるような仕事をして行くこと。

百六十八、お金は追わない、女も追わない、追うのは仕事だけ。

百六十九、感性を磨くには、失敗を重ねること。試行錯誤の失敗を。

百七十、哲学を持つて、抑揚のある話し方をしないと、相手の注目を集められず、

貴重な相手の時間を無駄にさせてしまう。

百七十一、任すとは、手を離して眼を離さないこと。眼を離しても心を離さないこと。

百七十二、人生の目的は、一生を掛けて、本音で話し合え、本音で付き合える友を

得ることに尽きるのかもしれない。

百七十三、クレームの生まれる元は一人一人の「まあ、いいか。」の気持ちから。

品質は人質(じんしつ)なのである。

百七十四、人が損をするのはたいてい、必要なことを学ばないから。

百七十五、皆のために一番苦勞した人が、結局は「徳」を得る。

百七十六、why(何故) because(何故ならば)をハッキリさせることが仕事では大事。

百七十七、情が根底に有つて初めて、理(システム)が活きてくる。

百七十八、人としての生き方を自分の生き様を通して社員に伝えて行きながら、

社業の器を拡げること。

百七十九、仕事を通じて人としての生き方を伝えるのが経営者である。

だから、経営者は生涯、人間成長の学びを続けるのである。

百八十、体調管理は仕事のうち。それを軽んずるなら、経営者をやめなさい。

社長が一番元氣でなければならぬからである。

百八十一、経営を熱く語るべきは、まず社員。そして得意先、関係先である。

百八十二、徹することは美しい。これを徹美と言う。

百八十三、厳しいから付いて来ないのではなく、信頼出来ないから、付いて来ないのである。

百八十四、上に立つ者として最も大切なことは、部下を信じ切ること。これに尽きる。

百八十五、社長がハッキリするから、社員がハッキリして来る。

「縁の深さ」がハッキリして来るのである。

百八十六、歴史上の人物の生き方を学ぶこと。それを自分のわずかな経験でしかない

人生に活かすこと。それが、自分に触れ合う縁ある人に勇氣と元氣を

与え続けることが出来る糧になる。

百八十七、人生とは、問題解決をすること。そのために、応用力が必要。

百八十八、全ては、応用力。他人の経験を素直に聴き、そして、自分ならどうするのか

を考えて行くことで応用力が身に付く。

百八十九、サービスとは、相手の困っている事、望んでいる事を迅速に解決することを言う。単に、おまけを付けることではない。

百九十、野心の無い向上心のある人は、美しい。

百九十一、小を侮る者、小、また侮られん。

自分より小の者を侮っていたら、その小の者からも、お前のごを侮られている。

百九十二、ピンにはピンの場所がある。

百九十三、氣は遣うものでなく、氣は配るもの。

氣は遣うと自分も疲れ、相手にも氣疲れさせてしまう。充実しているから、氣が配れるのである。

百九十四、心は込めるものでなく、心は注ぐもの。

込めるには、力みを感じ、注ぐには、丁寧さを感じる。

百九十五、志を同じくする仲間でも、ピンチが長続きした時、善し悪しでなく「縁」が深いか、浅いか、がハッキリする。

百九十六、医療の原点は「手当て」である。これを怠ることを、手遅れと言う。

百九十七、相手には、情を汲みながら、客観性の納得を得て行くこと。

百九十八、合意と納得の経営を。

百九十九、何事も楽しいから取り組むのでなく、真剣に取り組むから楽しくなるのである。

二百、行き詰まったら、全てを捨て切る。

二百一、己のものの捉え方で、心が救われる。全て、考え方、捉え方である。

二百二、考え方、捉え方を変えるのに、お金はいらない。

二百三、人間は、ちよつとした事でボロが出る。またちよつとした事で、品性を感じるもの。本物の人ほど「ちよつとした事」を観ている。

二百四、ワンマンとは、自分勝手を言うのでなく、全体を引っ張る統率力のことを言う。

二百五、取扱商品によって「スマール」を探究するか「ビッグ」を探究するか、自ずと定まってしまう。

二百六、道徳や善悪は人間が決めたもの。己の善悪の基準を明らかにせよ。

二百七、評価制度は、一種の「取引」でしかない。

二百八、理想は、システムではなく金力でもなく権力でもない。人格で以て、統治すること。

二百九、会社は、給料と労働の交換所ではない。

二百十、「仕組みづくり」が出来ていけば「人育て」がし易くなる。

二百十一、親(社長)の観点からは、五体満足(優秀な社員)を望むが、本当は、自然体が一番「しあわせ」を生む。

二百十二、全ての問題解決のヒントは「家族」にあり。

真の「家族」というものを深く考えてみよ。家族に利害は無い。

二百十三、販売先が親会社であれば、安定しているように見えるが、実は、不安定である。

二百十四、誠実な仕事をしているのなら、全国に個人顧客を持つ商いが強い。

二百十五、企業を百年以上継続させたいなら「繁栄」を望んではならない。

繁栄は膨張につながる。「老舗」に繁栄は無い。

坦々と自社を愛してくれるお客を創り続けるのみ。

二百二十六、自分の書いた文章を読んで、自分が熱くなれなければ、他人には伝わらない。己の考えを文章にする事で、理解度が増す。

二百二十七、報告は、上から部下へするもの。すると、自主的に下がするようになる。

二百二十八、幹部は「今、こうなっています。」「今、こうしています。」「社長に中間報告をしなければならぬ。それが社長に対する責任である。」

二百二十九、他社に真似の出来ない仕組みづくりは「人」しかない。

二百三十、理想の給与体系は無い。その会社に相応しい体系を作るしかない。

二百三十一、志があれば、どんな状況になっても、醜くは、ならない。

二百三十二、苦勞は、皆がもつと快適になるためにするもの。

二百三十三、社員のことを想う考え方を徹底した時、改善が生まれる。

二百三十四、たった一度の人生だから、何か人のためになるようにと、いつも考えることが大事。

二百三十五、潜水艦の艦長は時折、潜望鏡を覗かせ、現在の位置そして、向かっている方向を確認させる。だから、希望が湧くのである。

二百三十六、世界的視野で自社の業界を観て行き、適正規模を継続すること。

二百三十七、大きな煎餅は、口に入る大きさに割れば、食へられる。

二百三十八、オンリーワン(独自の存在)からシャイニングワン(個々が光り輝く存在へ)。シャイニングワンからプレジヤールワン(喜びを分かち合う存在)へ。

二百三十九、一つの商品の年間出荷量を決めてから、製造販売計画を立てることが大切。

二百四十、商品開発力がなければ、いずれ行き詰まる。

二百四十一、一日足りとも欠かしてはならないのは、「種まき」である。

二百四十二、得た学びを自分の言葉で言語化して掘り下げていると、

自分への浸透度が高まる。

二百四十三、責任の追及でなく、原因の追究を。

二百四十四、困つても、心まで困らなさいと。

二百四十五、代理店とは、メーカーの「理念、商品、仕組み」を代理して販売する会社

お店のことを指す。単なる販売店ではない。

二百四十六、商売の本質は「飽きない」を売ること。

商いが、お客さんや社員から飽きられないのが本質であると自覚すること。

二百四十七、出来る事なら、差し上げなさい。ケチケチするな。

二百四十八、受け入れるということは、それを生かすことである。

二百四十九、そんな自分でいいのかよ。と問い掛けて来る、もう一人の自分を持つこと。

二百五十、世に言う急成長とは、膨張である。故に、急成長してはならない。

二百五十一、思想(価値観)を考えることを哲学と言う。

その哲学を深めることを怠つては、ならない。

二百五十二、感動は国境を越える。宗教、思想が違つても、スポーツ、音楽、芸術が

実証しているが如く「感動」は国境を越えるのである。

そして人種は異なつても「赤ちゃん」を可愛いと感じるが如く「純粋さ」
「赤ちゃん」には、国境を越えるパワーがある。

二百五十三、感謝するから笑顔になれる。真の笑顔になれるのは、感謝してない証拠である。

二百五十四、親が子供を守るが如く、会社が社員を守つてやらねば、真の教育が出来るようはずがない。

二百五十五、行き詰まつたら、開き直れ。開き直るとは、心を開いて素直になること。決して、居直ることではない。

二百五十六、社長から一般社員に至るまで、「一流である」という自覚を持つ事から一流の道が始まる。我が社は何を以つて一流と成るのか、一流と言えるのか。社長以下全社員が日に一度でも、自らに問うことである。

二百五十七、ピンポイントに集中すること。でなければ、効率が悪くなる。

お客さんへのピンポイントアプローチには、センスが左右する。

二百五十八、真の自己実現とは、個人の夢を達成する程度のもを言うのではなく、天から与えられた役割を自覚して、それを仕事を通じて、果たして行くことを言う。

二百五十九、何かを取り組もうとする時や、相手に対する時は、まず、本質を観ること。そして多面的に観ること。併せて遠くから観ること。

そうでないと、人にアドバイスは出来ない。

二百六十、「蓄積」するのではなく「蓄える」のである。「蓄積」には、疲労が蓄積して病に、、、という受動的な面を併せ持つ。「蓄える」は、自らの意思によつて行なうもの。

二百六十一、失敗を「乗り越える」のではなく「蓄える」こと。人としての重さを蓄えること。重さとは、己の使命感、人生観、社会観であり、哲学であり計画である。つまり「蓄える」こととは「養うこと」である。

二百六十二、溜め込んで、いけない。粗大ゴミになる。己の中に一本の柱を立てること。その柱に拠って立ち、取捨選択して蓄えて行くこと。

二百六十三、経営者として、我が社として、蓄えるべきは何か。捨てるべきは何か。答えは、自らの蓄えの中にか、得られない。

二百六十四、社員の「和」は一夜にして出来ず。日頃より大切にしている心と行動により生ずる。

二百六十五、後継者の立場にある者は、社長が何を以って「安心」するのか、という一点を具現化することに誠心を尽くすこと。

二百六十六、まず、結論を言え。そして、理由を述べよ。

二百六十七、社員の多くが心底欲しているのは、和やかな人間関係の中で、伸び伸びと自主的に働ける快適な職場環境である。

二百六十八、採用した社員を確り人格教育することが、その会社に来る社会貢献である。と自覚すること。

二百六十九、まともな社員はいつも「この社長に、自分達の生活や将来を、預けて大丈夫だろうか。」という眼で見つめていると自覚すること。

二百七十、生き方のカクコイイ大人であり続けることが、青年たちに希望を与える。

二百七十一、真の可愛さは、ファッションから生ずるのでなく、言葉遣いと、立ち居振る舞いから生じる。その上でファッションセンスが大事。

二百七十二、社員に孤独を感じさせてはならない。孤立させることになってしまふ。

二百七十三、お酒は、コミュニケーションの潤滑油。ほめ言葉は心の潤滑油。

二百七十四、情の根底には、責任がある。責任なき情は、情が生かされず。

二百七十五、仕事も恋もタイミング。

二百七十六、追うべからざるものを追ってはならない。観念すべき時には観念せよ。

二百七十七、全体から考えて、どちらが良いかで判断せよ。部分的に見て行くべからず。

二百七十八、宇宙は前にだけ動いている。故に、人も前にだけ向いて動いていれば良い。

反省の振り返りはしても、過去に囚われてはならない。

二百七十九、「ネットワーク」でなく「連携」が企業価値を生み、連携が具現化した時、多くの企業に希望を与える。「連携」とは、志と技術能力が同じレベルでないと成し得ない。志と能力の得意分野の協力である。

二百八十、男は男の誇りに生き、女は女の優しさの中に生きる。

これは時代が変わっても、変わってはならぬもの。

二百八十一、食を、ほどほどにすると、心に「ゆとり」を生じて来る。

心の「ゆとり」が物事を円滑にして行く。

二百八十二、「福は内、鬼は外」ではなく「福は内、鬼も内」

善悪を超えて来たれ。という心構えが大切。

二百八十三、「櫂を飛ばす」とは「ガンバレ！」と闇雲にエールを送ることではなく、船団の先頭の船が「櫂」という鳥を飛ばし、目的地を指し示すことを言う。

二百八十四、上に感謝、下に願ひ。これが人としての思いである。

二百八十五、幸を求めて歩む人生は愚かなり。道を唯ひたすらに歩むのみ。

その一歩一歩の中にこそ、喜びがある。

二百八十六、人は必ず過ちを犯す。だから、過ちを犯した数以上に、人に喜びを与えること以外にないのである。

二百八十七、「ラブ」ではなく「愛」が大切。「ラブ」は個人の肉欲であり、

「愛」は、公の為に尽くす氣持ちである。

二百八十八、人の上に立つ者に絶対不可欠なものが「誠」である。それを実践するには「相手に理解出来る言葉で説く」ことである。そして、目の前にある事を一つずつ誠実に己の良心と信念だけに基づいて着実にやり抜く以外にない。

二百八十九、「品格」「教養」「愛国」「愛民」こそが生涯を通して探究すべきことである。

二百九十、希望とは、希(わずかな)望みのこと。つまり、大きな望みがなくとも、

人は希な望みさえあれば、勇氣が湧いて来る。そして、それだけで生きる価値が生まれる。

二百九十一、商品の質、社員の質、サービスの質が問われていると自覚する事。

二百九十二、リーダーとしての資質は仕事でしか、磨く事が出来ない。

二百九十三、地べたを這う体験をすると、思いやりの氣持ちが育つ。

二百九十四、現場で感じた疑問を勉強で解消し、学んだ事を現場で検証せよ。

二百九十五、人と人との縁の中に神が宿る。故に神が宿るような縁をつくる努力が大切。

二百九十六、素直な人を神は好む。つまり、素直な人に神が宿るのである。

二百九十七、工芸品は連係プレー。美術品はスタンドプレー。

美術品は一人の天才によつて出来るが、工芸品は、志を同じくし、かつ技術レベルも同じであつて初めて「工芸」に成る。

工芸品には文化を感じ、深みがある。日本は本来、工芸の国。

工芸のような会社でありたい。

二百九十八、真の資産は、顧客である。

二百九十九、独自の定石を身に付けること。伸びる企業と伸びざる企業は、自分の体質に合った独自のスタイルを持つているか否かである。

三百、苦勞を苦勞と感じさせない社風をつくる努力をせよ。

苦樂を共有し、共に前進また前進の姿勢で生き甲斐ある人生を求めて歩み続けようとする社風。このムード作り、これが大切。

三百一、 雰囲気は社員皆の協力によって出来るもの。一人の不心得者を生じた時、そのムードはいとも簡単に壊れてしまう。

お互いがお互いに注意しながら、お互いのムードを壊さぬ努力が大切である。

三百二、 最近の母親はやつて良い事と悪い事をきちんと子供に教えていない。

子供を叱る前に、教えざるの罪を自覚せよ。母親役である幹部社員も同様である。

三百三、 人の情けがはらはらと袖にかかる時、

人は誰しもその行為に報わねばならんと覚悟する。

三百四、 楽しみを共にする友人は持つていても、哀しみ苦しみを共にし、

共に泣いてくれる者がどれだけいるか否かを振り返ってみよ。

三百五、 道理と共に情理を兼ね備えた人が「器量人」なのである。

三百六、 信頼を得る道は信賞必罰にあり。信賞は行い易いが必罰は難しい。厳しさの伴った優しさであり優しさの伴った厳しさである時のみ、

人は信頼の情を燃やす。優しいだけで人は付いて来ない。まして厳しいだけで人は付いて来るものではないのだから。

三百七、 父の如き厳しさと、母の如き優しさが並行した上役に対し、

厳格な男の愛情を感じ、細やかな優しい愛情を感じるもの。

この男の愛と女の愛を感じるような上役に対して、初めて信頼の情を燃やすことが出来るのである。

三百八、 人と会い、良書を読み、ものを考える努力を続ける事で、哲学を深めるスタートラインに立てる。

三百九、 自分だけが良かれと願う気持ちがある間は部下を持つ資格は無い。

三百十、 「我が上役は勝手な事をする。」と感じた時、忠誠心は失われる。

三百十一、 威厳とは、生活態度に道義の匂いがあり、教養の匂いがあることを言う。

三百十二、 権限とは上から与えるものでなく、また下の者が上の者から取り上げるものでもない。自らが積極的に「自分にやらせて下さい。自分なら、こうします。」と進言し、上役の納得が得られたものを言う。つまり「己の守備位置

は何か。己は何をすることが任務なのか。」が権限である。

三百十三、 守備位置には質と量が必要。何をいつまでにやる。という質と量の決定を経営者がやること。

三百十四、 経営はこうするものと断定出来るものではない。

自分のサイズに合った経営学を学ぶこと。自分の器に応じた「分限」しか、身に付かないのだから。

三百十五、犬は猫になれないし、猫も犬にはなれない。梅が桜になれないように、

桜も梅にはなれないもの。己は、自社は、何なのか。見極めて歩むことが自分らしく生きること。

三百十六、定石を身に付け、それを自身で批判し、その会社に応じた独自の定石を作る以外にない。他社は飽くまで参考資料。

三百十七、有情活理な人は、すべてを生かそうという考え方をする。

三百十八、創造力とコミュニケーション力が無ければ、企業を経営する価値が無い。

三百十九、体験×情熱で創造力は生まれる。

三百二十、パートとは、勤務時間の短いパートナー社員である。

決して、パートタイマーではない。

三百二十一、清い水も泥水も元は同じH₂Oに変わりはない。だから、相手が泥水でも、批判は出来ない。

三百二十二、目先のことだけで動いてはならない。また、目先のことだけで、動かされてはいけない。時間と所と立場に於いて、全体を見て判断することを智慧と言う。

三百二十三、決断力の源は、志である。つまり、志を持つていなければ、深い決断は出来得ない。

三百二十四、困難に直面した時、迷いが生じた時、頼るべきは自分自身である。

頼り甲斐のある自分に成る為に志が必要。

三百二十五、デジタルで集客し、アナログでフォローし続ける。

三百二十六、訳の分からない人達と仕事はしたくない。訳の分かる人達と仕事がしたい。だから、多くの人を採用はしたくないし、最初が肝心と思う。その為に最初にトコトン合意と納得をしてもらう為に、相手が理解出来る表現力と社内の「仕組み」が大事である。

三百二十七、商売は、自分の考えを世に広めるための原資である。

三百二十八、周囲から見ても、微笑ましいと感じてもらえる会社でありたい。

三百二十九、過去の積み重なった姿が、現在の自分だという事実には変わりはないが、生涯を懸けて成りたい理想の自分、つまり志が今の自分を助けてくれるのである。

三百三十、社風の確立が出来ている会社の経営者は、楽しくて仕方ない。

だから、自分の描く社風作りに、お金を掛け、時間を使い、心を注いで、全精力を費やすのである。

三百三十一、現実には生きない経営や勉強は「いつ」である。

三百三十二、現実の「ものさし」しか、全員の同意は得られない。

現実をベースに同意を求めてゆく表現力が上に立つ者には必要。

三百三十三、社長道は天皇道。天皇とは、国民の幸福が自らの幸福と感じられる人物のこと。権力でなく、金力でもなく、人格のみで統治する人物のこと。

三百三十四、お金は血液、コミュニケーションは息。

血液は輸血出来るが、息は5分止まると死に至る。

だから、会社に於いてお金より、コミュニケーションが大事。

三百三十五、企業の本質は、零細会社であり。組織の本質は、家族にある。

三百三十六、組織に於ける最大の不幸は、能力の劣る者が、能力の優れた者の上に位置することである。ここに、全ての不都合が生じる。

三百三十七、言わなくていいから言わないことは、人生に影響はないが、言えないから言っていないことは、善かれ悪しかれ人生に影響あり。

三百三十八、まず、大切なことは現状認識から始めること。そして、原因を明らかにする。

三百三十九、志とは、全体に照らし合わせてその上で、自分に何が出来るのかを、自らが選び取って行くもの。決して周囲に迎合するものでなく、全体が発展する為に、自らが何を以って役に立つのかを自覚して歩むことである。

三百四十、形の美しさを美と言い、心の美しさを徳と言う。
この二つを合わせて「美德」と言い、美德を磨き続けることこそ、人生である。

三百四十一、志を一人一人が持っていないければ、快適な職場環境は成り得ない。

三百四十二、自分の出来る事で、身近なことを自分が続けられるか否かで器が変化する。

三百四十三、困った時は、胆を固めて相手の懐に飛び込むこと。

三百四十四、行動力は、使命感、信念、知識の総合力である。

三百四十五、先に見える人は、その当時の人達の共感を呼ばない。

三百四十六、胆の太さ、圧倒する迫力は、血のにじむような努力、決死の覚悟で、万全を尽くした人物にのみ、身に付く。

三百四十七、非難を甘んじて受け、責任の自覚を以って後始末に心血を注ぐ。

三百四十八、任せたりには、文句は言うな。任されたからには、信頼に応えよ。何かを成そうと思えば先ず、私心を失くすことに尽きる。

三百四十九、本当は、一所懸命にやるのが、一番「楽」なのである。

理由一、一所懸命やっていると成功の確率が上がる。

理由二、一所懸命やっていると人も感動し、信頼感も増す。

理由三、一所懸命やっていると失敗しても、悔いが残らない。

三百五十、説得は、利の裏付けを持つことが前提である。

利の裏付けを持って、情に訴え、志に訴えるのである。

三百五十一、これから先、何を為すのか、何を成したいのかを、考える事から全てが始まる。

三百五十二、どんな国を創るのか、どんな会社を創るのかを、お互いに共通の想いを持つて歩むことが幸福なのである。

三百五十三、今、為すべきことを考え、今日、少しでも出来れば良いのである。

三百五十四、日本人は日本人の美学の上に立って歩めば、それで良いのである。

三百五十五、一人一人の意見を聞くだけでは、和は成り得ない。

一人一人の理想を述べさせることで、徐々に共通のものが生じて来る。

決して仲良しのことを和と言っているのではない。

己を貫き合うことを和と言っている。

三百五十六、社員一人一人を自主的に精一杯の弦を張らせている人が居るや否や。

その奏者が社長である。

弦が張っている状態とは、日々、自分を新しくする努力のこと。

張るとは、同時に引つ張る事と収縮を繰り返している状態のことを言う。

三百五十七、苦しみ、悲しみの原因を取り除くには、己れ自身で取り除くしか無い。

つまり、己を極める以外に方法は無いのである。

己れを極めるとは、己れは何者なのかを見極めて行くこと。

三百五十八、経営の勉強でなく、人間の勉強をせよ。

教育の勉強でなく、母親の勉強をせよ。

三百五十九、経営者と社員に身に付けて欲しいのは「遅しさ」と「優しさ」である。

遅しさと優しさの溢れる会社でありたい。

三百六十、経営者は、社員一人一人の居場所を作つてやる事に心を注ぐこと。

その為には、一人一人を見抜くことである。

三百六十一、悟りとは差を取る。他人と自分に対する対応の差を取ることを言う。

三百六十二、攻め以外に勝利なし。

攻めるとは、思う一点に全力投球することである。

三百六十三、絶対に妥協しない商品作りが、営業活動を支えるのである。

三百六十四、利益を出しつつ、理想を追求する。

三百六十五、自分の第一に譲れないものを持つ。揺ぎ無いもの。それが、志である。

三百六十六、煩惱を断ち切らずに、自分は今、何を為すべきかの「自覚」を皆が持つて

「一つ」を歩むこと。

三百六十七、人生を生きる心構えは「息を合わせる」こと。

三百六十八、人を育てることは、同時に自分をも育てることである。

三百六十九、教育の原点は、「共に在る」こと。

三百七十、自分は何を為し、成すべきなのか。見極める為に、学問が要るのである。
三百七十一、自分で修行していると思っていると、実は同時に垢が付いているのである。
三百七十二、仕合わせとは「仕」＝「為す」ことの意。つまり、お互いが為すことをして行く。そして、お互いが合わせることを仕合わせと言う。

三百七十三、経営理念が、社員、商品、戦略に行き届いていなければ「意味」が無い。
三百七十四、考え方を形に出来なければ「意味」が無い。

三百七十五、社業という経済活動を通じて、真理を一生懸けて探究する人のことを、
経営者と言う。

三百七十六、真の会社とは、縁あって来たれし社員の子供のことまで考えて、
その子供が人の道を自立して歩めるよう実践が成されている会社である。
その為に、社員一人一人を指導者として育成して行かねばならない。

三百七十七、本を読むのも目標を持って、いつまでに読むと自分に決めて読め。
三百七十八、会社の評価とはバランスシートで行わず、その会社の幹部が何度、

危機を勝機に変えたかで、評価せよ。

三百七十九、人を憂える(心配する)と書いて優しいと書く。

つまり、人を心配してあげることが「優しさ」と言い、
人を自立させてあげることが「思いやり」と言う。

三百八十、

理念の無い人には、他人の悪い所しか身に付かない。
理念の有る人には、他人の良い所が身に付くようになっていく。